

大崎ひまわり訪問看護ステーション

症例概要 利用者氏名：S・Y様（60代・男性・要介護5）

利用期間：平成31年4月～令和1年7月

経過:平成29年3月に遠位胆管癌N1、ステージIIBの診断。ひまわりケアマネジャー担当開始。平成30年10月に多発肝転移発覚。抗がん剤治療を継続も令和1年6月に体調不良にて入院。方針が在宅緩和ケアとなり6月下旬に退院し、在宅診療とひまわり訪問看護利用開始。全身状態徐々に悪化し、7月上旬に敗血症の診断。7月下旬に意識レベル低下、呼吸停止し逝去される。

内 容

Sさんは往診や訪問看護を利用する事は「もう治らない」という認識でいました。

生きる希望を持ち、抗がん剤治療を継続していましたが、6月中旬に再入院。入院中に今後の方針は在宅緩和ケアとなり、退院に合わせ在宅診療と訪問看護の利用を開始となりました。Sさんにとって非常に辛い宣告だったと思います。

しかし、実際に利用したSさんからは「こんなにいいサービスだったなんて・・・もっと早く利用すればよかった。他の人にも勧めたい!!」と、ご家族のケアを拒否して看護師にお願いするほど信頼して頂きました。

その後全身状態の悪化がみられ、7月上旬に敗血症の診断を受けました。Sさんは「やりたいことがいっぱいあるが、孫のピアノの発表会にも行けそうにない。歩いて行けないなら行っても意味がないし、孫が恥ずかしい思いをするだけだから行かなくていい」と言いました。

ご家族と医療スタッフはSさんに発表会を見せたい思いで、当日行く準備をしておいて、ご本人の体調で決める事としました。

7月上旬に主治医より「発表会はSさんが行きたければ、その日の体調で決めていいです。その日当番だから何かあったら連絡下さい」と。ご家族だけでは不安とのことで看護師、ケアマネも同行する旨を伝えると、「孫が（私に）来られると緊張してしまうかもしれないね」と笑顔が見られ、Sさんに安心して発表会に行く決心をしてもらうことが出来ました。

発表会当日、演奏中は目を閉じ涙をこらえじっくりと音色を聴いていました。演奏終了後は、孫と顔を合わせお互いに涙。その日の夜は家族団らんのひと時を過ごしました。

7月下旬に、意識レベル低下見られ看護師訪問。長女夫婦は最期に娘を立ち合わせていいものかと悩みひまわりに相談。中学1年生の孫が出した答えは「会いたい」でした。どんな時も常に見守り応援してくれたおじいちゃん。ご家族全員と訪問看護師に見守られ旅立ちました。

大病を患った夫へ妻の最後の恩返しが叶った瞬間でした。